

木

材会館の設計を担当した株式会社日建設計の勝矢武之さんは、「我々は都心の建築物を手がけることが多く、これまで木をあまり用いて来ませんでした。そのため木材会館の建設のお話をいただいた時、そもそも木を用いる際にはどんな制約があり、現在の法規と技術の中で木にどんな可能性があるのかを検証することから設計が始まりました」とスタート時点を振り返ります。

「都市建築の中で木を使おうとすると、木材が可燃物であることから、防災上の制約が障害となります。しかしながら、二〇〇〇年の建築基準法の改正によって性能規定という考え方が導入され、要求性能を満たせば制限が緩和される道が整備されました。今回の木材会館の設計に当たってはこの性能規定を全面的に活用し、都心の建築で木材を様々な形で使用する方策を探ってきました。まず、耐火検証法と構造の評定を受けることで、新しいタイプの木材の構造体を実現しています。次に建物の外側でも、耐火検証法の評定を受けることで、木に包まれたテラスと木材による外装を実現しました。さらに、内装では避難安全検証法という手法を用いることで、不燃材を使用する」という規定を緩和し、ムク材の木をふんだんに用いています。これらは、実はオフィスビルなどの設計で一般に使用されている手法を工夫して用いたものであり、様々な形に応用できることから、木材利用の

木材の使用が制限を受ける都市建築の中で、内・外装にふんだんに木を使った建築物が東京の木材の街・新木場に誕生しました。東京木材問屋協同組合が建設した木材会館は、主たる構造は鉄骨鉄筋コンクリートですが、最上階に木造のホールを有し、その内外には1000立方メートルを超える木材を使用しました（表紙の写真参照）。建物内の木材には250tの炭素が固定されており、環境貢献にも役立っています。



勝矢武之(かつや・たけゆき)／建築家

1976年 兵庫県生まれ。1998年 京都大学建築学科卒業
2000年 京都大学大学院修士課程修了。日建設計入社。
2008年 NSD(日建スペースデザイン)

<受賞暦>

2005年 照明学会 照明学会賞(ルネ青山ビル 2005)、
2006年 SDA賞 優秀賞(ルネ青山ビル 2006)
2006年 JCD デザインアワード銀賞(桐朋学園大学アネックス)
2008年 日本産業デザイン振興会 グッドデザイン賞(乃村工芸社本社ビル)
2008年 東京建築賞 東京都知事賞(桐朋学園大学アネックス) 他

可能性を広げる契機となることを期待しています。」と従来の木材利用が変わる可能性を示唆しています。

また勝矢さんは、大型建築物で木材が使用されにくい理由として、木材は大工による少量加工品という認識があり、精度を得にくく、また大量に使うのが難しいと考えられている点をあげています。「今回は、NC加工というコンピューター制御の機械加工を全面採用することで、高い精度と大量加工を可能にしました。最上階のホールでは追掛大栓という伝統的な木の継手をこのNC加工で再構築して用い、伝統と現代技術の融合を図っています。また、NC加工では〇.1mmという高い精度を確保できるため、これまでにない形での木の使用が可能になります。」と現代技術がもたらす新たな可能性についても語って頂きました。

一連の技術的な説明の後、「でも、なんといいっても印象的なのが、木の空間がもたらしてくれるやさしい表情です。多くの方が来館されるたびに、目で見えて触れるだけでなく、木の香りを楽しんでいきます。五感に訴える優しさこそが木の魅力です。建物の実現には様々な苦労がありました。こうした皆さんの表情を見ていると、木のすばらしさというものをあらためて実感します。これからも木材を使用した建築の設計に携わっていきたいと思います」と設計者から見た木材の魅力を語っています。